



羅針盤



大山 学

Manabu Ohyama

杏林大学医学部皮膚科学教室 教授

脱毛症の今、そしてこれから ——私的キャリアとのクロスオーバー

「ヒトの毛の幹細胞を生きたまま取り出そう！」私の脱毛症との出会いは、留学先のアメリカ国立衛生研究所 (National Institutes of Health : NIH) でのボス (故 Jonathan C. Vogel 先生) の何気ない一言から始まった。遺伝子治療を研究するつもりで渡米した自分にとっては、予想外の一言であった。しかし、それまで研究していた水疱症のモデルマウスがひどく脱毛していたのは不思議であったし、外来で脱毛症の患者さんに遭遇しても教科書的な治療しかできないことに限界を感じていたこともあり、思いきって毛包幹細胞、そして毛髪疾患の研究に身を投じることにした。

環境にも恵まれていた。留学の前に交換レジデントとして訪れたペンシルバニア大学で、毛包幹細胞がバルジにあることを発見した George Cotsarelis 先生と知己を得ていた。また、NIH と道路を挟んだ反対側の米軍医療施設には、脱毛症病理の教科書を書かれた Len Sperling 先生がいらした。これらの大家から直接、脱毛症の臨床・病理を学ぶことができた。

そして帰国、大学に帰室。一人でとにかく脱毛症の専門外来を立ち上げることに力を注いだ。教室の先生方から一般外来の患者さんに受診を薦めてもらい、初回の予約は確か 8 人だったと思う。月日は流れ、今、毛髪外来には数多くの患者さんが受診される。医師冥利に尽きることである。

脱毛症は酷な疾患である。確かに命に関わるものではない。しかし、一番目につく部分に生じる疾患であり、患者さんに与える社会的・精神的ストレスは、われわれ

の想像をはるかに超えるものがあるだろう。しかもエビデンスに支えられた治療法は限られている。それだけに実際の診療のなかで自分の力の限界を感じる場面も数多い。なんとか診療・治療の技術を向上したいと思いつけてきた。

ここまで脱毛症と関わり続けることができたのは、私が脱毛症の臨床・研究を続けることを温かく見守ってくださった、天谷雅行教授をはじめとする慶應義塾大学医学部皮膚科学教室、そして杏林大学医学部皮膚科学教室の先生方、大学を超えてご指導いただいた先輩の先生方、同年代の志を同じくする仲間 (とあえて呼ばせていただく)、多くの患者さんの存在があったからである。心から感謝の意を示すとともに、より一層疾患の克服に向けて努力したいと決意を新たにしている。

ちょうど自分が新しい施設に異動したこともあり、これまでの脱毛症診療を振り返り、これからの展開につなげたいとの思いから、本特集号を企画した。診断・治療の基本をもう一度確認したい、将来の治療の可能性を知りたい、そして、実際に経験した、あるいは学会で印象深かった症例を紹介したい、という私の思いをご理解いただき、ご協力いただいた先生方にあらためて謝意を表したい。

なお、掲載した症例の多くは、慶應義塾大学病院皮膚科毛髪外来で私自身が著者の先生方と一緒に経験したものである。資料の使用をご許可いただいた慶應義塾大学医学部皮膚科学教室に深謝しつつ、巻頭言を結びたい。